

① 孝田先生に就て

藤原暎平

昨の水産講習所長下啓助先生が長岡半右衛門先生  
に問かれて水産に於て物理学が必要だと云ふの事  
田先生を推薦されたと思ふ。自分も同時に此に同所  
の嘱託と云ふたのが其の事さつ<sup>は</sup>覚へて居た。  
何でか中村<sup>中央</sup>先生の所へ下啓長の前で此を述べたか  
の様に思ふが、~~要するに或は~~要するに孝田先生を  
て生徒の爲の講習をさせるの件勿体ないから講習  
は所長に任せ、即ちの研究の指導も孝田に任せ  
と云ふ事であつたかと思ふ。一週一週又は勤し、二人

音知

(2)

「應用物理」原稿用紙 (22×10) 8枚で1頁に當ります。

平假名—口語體

昔  
 同じ日で、木曜日位だつたうと思ふ。自分は物理學  
 を二時三時講義をし、午後三時三十分迄の實驗を世治を  
 した。此實驗は小澤新藏先生と云ふ物理學技師の助手もたつたので  
 然るに此實驗が同分には若干で、其れを尋ねると  
 先生の原簿して下つた。殊に一弦と音義とを使ふて振動數  
 を測る實驗に於て自分の耳に依りしこも階調と云ふ  
 事が解すが、それには實に若干の音響の先は  
 此方々のところである為、先生が之れを良しと云ふ  
 事もあるといつても先生に見て戴いた。其後何年か  
 してオーストリアのウィーンで見た所ト音の harmony と  
 云ふ事があるとなと判つた所、今時の若い人にも此

あるを説してもうそと思ふのも知れぬ。その昔の因  
 縁<sup>ヲ</sup>には此様かのか少あくはあつた。たゞも小學校  
 の「音楽」と云ふ学科は學んだので<sup>た</sup>つた。

先生は此童謡に於て螺子のつかい方と云、曲線の  
 引き方と云、四隅童謡のこつをよゝ説された。二年か  
 三年の一度に一度づゝ何かと先生に教つた。たゞは  
 自分の取つて忘れたらぬ。経験であつた。其頃の

先生は衣服の層々に現はれる略等間隔<sup>と</sup>、火山脈上  
 の略等間隔の比較と云、生物<sup>の</sup>の<sup>は</sup>に於て凡そ年越する

Dimension があつ、是の frequency curve の maximum

②

の出来才と物の略等間隔の傾きがあるといふ。これ  
採る生物と地学をこつちでしと採るに就しおよ  
く知られた。先づお氣象學と海の物理学を講義せし  
れたのはお氣象と水産講習會へ行なれるよつとあつた  
たのと思ふ。或は同時頃とも知らぬ。其後の物理  
を水産に意向し採るに云ふお氣象の使命に就つて  
是時漢語講習會の主任の<sup>川</sup>合角也さん、小~~澤~~瀬次郎さん等  
お物とあしと網とのおアハたの<sup>イ</sup>キたのに就ても理  
論を懇し。と云ふ採る講義、然用頭曰即ちと云ふ  
採る助牛おたつて、網の水の抵抗の測定や、網糸の

滴

5

磨折の真珠を砕けしめた。又此頃呉語有る 業蹟  
~~と~~ 此人造真珠の 又線格子に依る見合け方  
 であつた。 之れは **通**士食堂で下町表の御木本  
 氏の人造真珠の成功を月慢せしめたのこ始ま  
 り、町表の到底天然と人造との見合けは出来ぬ  
 いと云ふれたるに對して、是れは笑へお可し 之れ  
 は 眞と生珠とせう、わつて見ませう といふ様  
 あり、之れを御木本氏の上等真珠と高懸  
 せしめて西川博士と共に真珠を砕いたのであつた。  
 集真燈の、網に入つた眞の **通**子少せ知る 燈

20 x 10

軍の考察等があり、工学部電気科の西博士が此  
 頃本邦への大卒出たてで先づ此處に賣給を  
 受けた分、此れは仲々馬子標に作り可い人だ。尤  
 も此賣給の5先づは turbulent motion、就て終に  
 混同する出さぬ。

~~清田~~ 印田也也 此頃會費 <sup>妹尾教授</sup> 入集まつた額振れは  
 下野長と書記の宮崎賢一 <sup>妹尾教授</sup> 比、航海学の岸大佐、岡  
 野教授岡村先生、春日現場長此系多作計算にて  
 此系氏とは未だ名を知らぬと云へる意見も殊は  
 世に。其他木村金太郎氏より時製造への... 2時

口に強可あつた様にも思ふ。又丸竹さへも籠へ向

題を去し、これに様にも思ふ。

先んずか始り、はいつと鯉類を注文され、自らも

喜似て、これを取つて、たつた可、一変に臭ふた

事かあり、先んずか之を死んだものや食せせぬの

たろ、と云ふ、若くはけず、其後は牛肉にしな

り、柳川にしなりして、猪而倒れ、た。此頃の鯉

は、深川には好む安のつた。

此頃電車は、足板橋の、靈岸島里に、行で乗

た、と、門前仲行、主かあり、其途中、か、下りて

中一の橋造の人名があり、それより高松学校の  
 前通<sup>丸は</sup>牛草子で右は糧材廠で人名は左の高松学  
 校の所より丸に由つて溝沼司であり、其次は  
 工業試験司であり、其の溝沼司は申す迄も  
 亦く今の水産講習所と水産試験場と合併した  
 ものに~~解~~揚肉に寄宿をせよとあり、是等は  
 帰り牛黒に可造あり、又電車に乗るに於て、右に  
 右に~~注~~の一端にあり、此迄を案内する標本  
 時に~~一~~原は同行せよの本巻は抜付裏の揚  
 本館を通るの時に~~一~~、自分一人であり、いつと

